

前回の美術館協議会（令和6年7月30日開催）でいただいたご意見に対する対応状況

| | ご意見 | 対応状況 |
|---------------------|--|--|
| 1 集客・広報 等について | (1) 企画展を見に来た人にもっとコレクション展も見てもらえるよう、コレクション展をもう少し見たくなるようなキャッチーなものにして、その内容や意図がより伝わるよう工夫することが必要。 | 館外のゲストキュレーターに当館のコレクションの新たな見方や解釈を提示していただき作品の新たな価値を見出す手法を取り入れるなど、工夫していく（昨年コレクション展第Ⅲ期では、公開制作招聘作家・原田裕規氏に依頼）。 また、コレクション展示室の存在をアピールできるよう、入口にバナーを垂らしたり、人目を引く印刷物を掲出するなど、館内の広報にも工夫をしている。 |
| | (2) 現在のインバウンド用チラシでは、外国の方々には結局わからない状況。QRコードで各国の言語のサイトにアクセスできるようなメッセージ性のあるチラシがあるとよい。美術館に足を運んでもらえるようなきっかけ作りをしてほしい。 | 今年度、多言語化（英語・中国語）対応のホームページ改修を予定している。その上でインバウンド向けQRコード付きチラシを制作し、サイトにアクセスできるよう準備する。 |
| | (3) 南信州の文化をテーマにした展覧会を組むとか、南信州からの来館者のためのバスツアーや割引き等の優遇措置を設けるなど、南信州の人々が県立美術館を身近に感じ、訪れようと思うような取組をしてほしい。 | 10月から開催予定の東山魁夷館35周年記念展では、南信を始め県内外からの鑑賞ツアー造成を予定している。 既に展覧会で取り上げた南信出身の池上秀敏や松澤宥などについての調査は引き続き行っている。 |
| | (4) 今までレストランで企画展とのコラボメニューを出していることに全く気づかなかった。せっかくコラボメニューを用意するのであれば、美術館のホームページを見ればすぐにわかるようにしてほしい。 | メディア広報に力を入れると同時に、ウェブサイトやSNSでの個人向けの配信強化のための方策を検討している（投稿してもらうための視察の実施等）。 |
| 2 館の事業について | (1) ○ 「学習」の取組をもっとやってほしい。人と触れあい、作品を通して、子ども達がお互いの言っていることを「いいね」と言えるような、賑やかな空間があってもよいと思う。 ○ アートラボは、内容が充実しており、ぜひ続けてほしいし、もっと大きくやってほしい。 | 「学習」の取組は、当館としても力を入れているところ。 アートラボは、基本的に当館所蔵の「触れる作品」を展示するものであるが、展示替えの都度その作品を制作した作家を招聘し、展示指導をお願いしている。同じ作家でも毎回展示方法が変わり、作品展示に新たな解釈が示されるようになってきている。 |
| | (2) これから中学校の部活動が地域移行されるが、部活動が無くなったときの受け皿が無く、大きな問題となっている。アート・コミュニケータは貴重な人材。部活動の地域移行とつながるとよい。 | アート・コミュニケータは、3年間の美術館での活動の後、各々の地域で自発的な活動を実施してもらう事業。強制することはできないが、当館としても地域移行とどこかのタイミングでつながることを期待している。 |

| | | |
|---------------|---|---|
| 2 館の事業について | (3) 研究活動と常設展がきっちりと連動していくことが大切。「学習」という信州らしいところが学芸員の活動の中でも発揮されると、より「長野県立美術館」らしさが出る。 | 各学芸員の専門に照らし合わせて、収蔵品のジャンル別の担当者を決めた。近年増加している作品寄贈の申出の際には、その作品のジャンルの担当者が調査に赴くこととし、収蔵品も含めて、そのジャンルの作品研究が深められるような機会を作り出している。 |
| | (4) 作品の修復活動は、修繕活動であると同時に研究活動だと思うので、予算が確保され、必要な修復がしっかりできるような仕組みを考えてほしい。 | 現在、作品修復費は、館全体の修繕費の中にあるため、大掛かりな修復は予算的に難しいが、毎年、細々とした修復を計画的に進めている。また、《朝明けの潮》の額装のような大掛かりな事業は、館外の補助金を得て実施することができた。 引き続き必要な修繕費が確保されるよう努力していく。 |
| | (5) 環境志向が強い展覧会を計画しているので、気候危機に対してアクションするという県の施策と館の企画の方向性が合致していることのアピールをしてほしい。 | 展覧会担当者や県の政策担当者取材するなどして、企画記事等で広報、配信することを検討する。 |
| 3 接客態度について | ○ 美術館は一般的に監視的な感じがして冷たく感じることもある。ルールを人間らしく解釈して、この美術館がもう少し温かい雰囲気になるとよい。 ○ 善光寺さんとの一体性を考えると、「優しさ」とか「癒やし」をキーワードにできる美術館であることが大切。「お招きする」という温かい姿勢がないと人は来ない。 | 受付、看視スタッフには、TP0に応じた対応を行うよう要請しており、受託業者も接遇研修を実施するなどして対応しているところだが、経験値や個人差の問題もあって、スタッフによる対応のバラツキがあることも事実。引き続きお客様が気持ちよく観覧頂けるよう努める。 展示室内にわずかな数のお客様しかいないような場合、立ったまま看視業務に当たっていると監視されているようでゆっくり観覧できないとのお声もあるので、展示室内に観覧者がいないか、ごく少数の場合はイスに座って業務に当たるよう指示した。 R6年度来館者アンケートでは、スタッフの対応についてお褒めの言葉を頂いている状況もある。 (対応が柔らかく親切、気持ちの良い接客だった、何度か車いす連れで来ているが困ったことは一度もない、等) |
| 4 施設について | ○ 屋上のウッドデッキが公園のように使われるとよいと思う。 | 屋上テラスは、6月～9月までの間、美術館閉館（17時）後も18:45までは自由に出入りできる。 灯明まつりの際は、撮影スポットとして21:00まで夜間開放を行っている。 まだ構想段階ではあるが、将来的には屋上テラスにも当館を象徴するような作品を展示して、多くの皆様に気軽にお立ち寄り頂けるようにしていきたいと考えている。 |
| 5 職員体制について | ○ 正規職員がもう少し増えた方がよい。 ○ 32名の職員でこれだけ多くの事業を行うのは相当大変なことであり、仕事の質を落とさないような仕事の回し方の工夫が必要。 | 次期指定管理（R8年度～）を受託できれば、その5年間の中で、必要な人員の確保や嘱託職員の正規化を順次実施できるよう予算措置をお願いしていきたいと考えている。 また、適正な業務量を常に模索しており、常設展示（本館・東山館）をそれぞれ5期制として展示替えの回数を減らし、業務量の削減を目指した。 |